

北陸ASEAN展望

北陸JECの視点



寺尾重資

地方のASEAN展開

で開催。参加者には地方の行政、経済団体、企業の出席者も多く、地域の取り組みが紹介された。

さて、鳥取県は境港から韓国・東海、ロシア・ウラジオストクをつなぐフェリー便がある。ウラジオストクにはサポートセンターも設置している。環日本海諸国、特に北東アジアとの連携を活発に進めていることは知っていたが、タイに進出している企業が中国に次いで多いことは初めて知った。

一九三九（昭和十四）年に二十世紀ナシを輸出している多くの県産品を輸出している。古くは十六世紀から交易があり、一六〇〇年初めにはタイ行き朱印状が鳥取鹿野城主に下されたという。日本の各地は過去、海外との交流が盛んであったことがうかがえた。

鳥取県の製造業は事業所数、従業員数、製造品出荷額とも大幅に減少傾向。国内需が縮小する中、国際競争力をつける、新興国市場を中心とする海外需要の取り込みが必

要との認識から、東南アジアの活力を取り込もうとする必死の思いも感じられた。鳥取企業の事例紹介があり、海外に展開の可能性を持つ多くのニッチトップ、オンリーワンの企業が存在することを知った。

松島氏の著書「空洞化のウソ」にあるように、地域に根差した地方企業も積極的に海外展開すべきであり、国際化には地域間のつながりが大事である。この会議を機に日・

（北陸ASEAN）北陸環日本海経済交流促進協議会常務理事事務局長）

八月に鳥取県で開催された第二回「お互いプロジェクト」地域キーパーソン会議にあり参加した。北陸地域の海外事業の状況を報告するよう、事業推進役のタイ王国政府政策顧問の松島大輔氏から求められたためである。

北陸AJECは二〇二二年の設立二十周年を迎えたのを機に、対象地域を東南アジア諸国連合（ASEAN）にまで拡大。総会には金沢市出身でもあり、タイと日本各地の経済交流を精力的に進めている松島氏を招き、特別講演をしていただいた。

その中で同プロジェクトの二回目以降を地方でと鳥取県

第一回は東京で開いたが、

アジア展望

北陸の視点



北陸AJEC（北陸環
日本海経済交流促進協議
会）は二〇二二年、設立
二十周年を迎えた。名称
通り環日本海地域を対象
に活動してきたが、二十
周年を機に活動範囲を東
南アジア諸国連合（AS
EAN）にまで拡大し
た。企業の関心が中国と
同等、それ以上になった
のを踏まえた。

北陸の企業がASEAN
Nに関心を強める中、北
東アジアを冠した北東ア
シア学会（旧環日本海学
会）北東アジア研究交流
ネットワーク（NEAS
E-UNET）の総会に出
席した。いずれも北東ア
シアの発展に寄与するこ
とを目的にしている。

「環日本海」という呼
称に海外の抵抗があるた
め「北東アジア」を名乗
るが、実質は日本海を取
り巻く地域、国が対象。
北東アジア経済圏や環日
本海経済圏など局地的な

寺尾重資

北東アジア地域と北陸

経済圏を創出しようと取
り組まれた時期が過去に
あったが、挫折した。

経済圏、共同体は実現
できなかったが、中国は
経済大国になり、韓国は
海外展開を高め、ロシア
は極東ロシアを太平洋に
向けた窓口と位置付け、
それぞれ存在感を増し
た。日本との関係も深め
た。

NEASEUNETの半は太平洋を向いてい
る。北陸から見る。「環日本海諸国」地
域のネットワークと言
現できるか」とコメン
トを求められた。「制度
的統合は無理だし、北陸
がASEANを含め多角
的な地域との経済交流を
進める際に逆に障害にも
なる」とした一方、「北
東アジアのくくりがいら
ない」という議論がある
が、日本海を取り巻く地
域は大きな可能性を占
め、東アジアが世界経済
の極となる中、存在が重
要になる」と指摘。さら
に「日本海を通じた物流
は大きな流れであり、日
本海を介した経済交流連
携は必要」と答えた。

てらお・じゅじ 1974（昭和49）年上
智大卒。北陸電力入社後、97年北陸経済連合会
（北経連）理事事務局長、2003年同専門部
長、05年同常務理事、北陸AJEC（北陸環日
本海経済交流促進協議会）常務理事事務局長。
11年北東アジア学会理事。金沢市出身。64歳。



アジア展望

北陸
AJEC
の視点



く、「経営トップが海外展開をどのように決断するか」。決まれば送り込めばよい。国際化という概念もいろいろなと。

寺尾重資

北陸AJECは、北陸の企業の国際化へのマインド調査を定期的に実施している。直近の二〇一二年の調査では、「国際化への必要性を感じている」が前回より5%伸びた。それでも「関心なし」が六割を超える。

「必要性は感じる」「関心がない」とした企業の理由に「国際化に向かない」「国内で十分に企業活動ができる」との答えが多い一方、「国際化への志向がある」としながら、人材やリスク管理、販路などが国際化のネックになっているとの回答も相当数見られた。

特に、「国際化を展開する人材がいらない」との回答が三番目に多い。その対応として、日本人社員の語学教育や海外赴任者の育成などに関心を持

企業の国際化と人材

つ反面、留学生の活用には「社内でのコミュニケーション能力」「生活習慣、文化の違い」などに懸念を持っていることが明らかになった。

このため北陸AJECは、「グローバル人材の育成、留学生の活用」に向けた仕組みづくりに取り組むこととし「三年度、企業や大学、行政で構成する研究会を立ち上げる」。

海外展開を積極的に進めてきた企業の経営幹部と最近、この問題について話をする機会がある。このことを念頭にした。この幹部は「人に、研究会を進めたい。材がいる、いない』『ど（北陸AJEC常務理事のように育てる）ではな事務局長」

てらお・じゅうち 1974（昭和49）年上智大卒。北陸電力入社後、97年北陸経済連合会（北経連）理事事務局長、2003年同専門部長、05年同常務理事、北陸AJEC（北陸環日本海経済交流促進協議会）常務理事事務局長。11年北東アジア学会理事。金沢市出身。64歳。



北陸
AJEC
の視点

展望



能向上などがこれからである。

タイでは、訪問時カンボジアとの世界遺産地帯の帰属問題で、一万人規模のデモが発生したが、いま行われている反政府

デモは予想もしなかった。も、定期的企業アンケートから関心地域が中国を抜いて一位になったことを踏まえ実施した。二〇一五年のASEAN共同

体に向けて国境を越えた連携が進められている。こうした背景により整備が進められている回廊、そのうち発展状況が異なる南部回廊、タイ、カンボジア、ベトナムを視察することにした。各地で遺跡を見たが、この地域は民族紛争の歴史であり、現在の発展段階も違つ。日本企業が進出するには、三国の均衡ある発展が望ましい。各種インフラ整備、行政機

能向上などがこれからである。タイでは、訪問時カンボジアとの世界遺産地帯の帰属問題で、一万人規模のデモが発生したが、いま行われている反政府デモは予想もしなかった。当時の報告書にもあるが、国民性はいろいろ違うが、ピリピリとした感じがなく、雰囲気は温かいと感じ、非常に親日的であった。この関係は大切。そんな中、韓国、中国企業の進出が目立つ。特にカンボジアでは、中国がトップドナー国(資金提供国)であることが気にかかる。

二十年という期間、変化をどうみるかである。国際交流は継続が必要で、継続した情報収集の重要性をあらたに感じた。

てらお・じゅつじ 1974(昭和49)年上

智大卒。北陸電力入社後、97年北陸経済連合会(北経連)理事事務局長、2003年同専門部長、05年同常務理事、北陸AJEC(北陸環日本海経済交流促進協議会)常務理事事務局長。11年北東アジア学会理事。金沢市出身。64歳。

寺尾重資

視察で感じたこと

北陸AJECは十一月中旬、北陸経済連合会と合同で、東南アジア諸国連合(ASEAN)視察を実施した。北陸経済連合会の同地域への視察は二十年ぶり。

一九九三年のベトナム視察報告書には「この地域はここ数年高い経済成長をとげ、特にベトナムは、ドイモイ政策によって外資導入を積極的に推進し、アジアのラストフロンティアとして脚光を浴びている」、九六年のミャンマー視察では「豊かな天然資源と勤勉で低廉な労働力により、『ポスト・ベトナム』と位置付けられ、民主化や市場経済制度の導入の動きから直接投資先として注目が集まってきている」と記載されている。

今回のASEAN視察

2014. 1. 10
北中


アジア展望

北陸 AJEC の視点



北陸経済連合会は、過去幾度か海外を視野に入れた北陸ビジョン、戦略を策定してきた。

一九九七年に創立三十周年を記念して、「北陸二十一世紀ビジョン」を策定。北陸を環日本海経済圏の中心と位置付け、北陸の産業、交流、文化、生活における二〇一〇年、二〇年の将来像を描き、スローガンを「北陸はひとつ、恵まれた自然を守り、英知・情報・技術を結集し、世界に開かれた産業・文化の拠点、日本海国土軸の中心を目指す」とした。

○五年には、東アジアを視野に入れた北陸三県一体となった環日本海交流のあり方、ゲートウェイ機能のあり方を検討し、今後の地域戦略の方向性を取りまとめた。

北陸は東アジアの経済発展を取り込んで発展すべきだとし①チャンスとリスクを見極めた東アジアとの取引・進出の拡大②北陸と東アジアとの

寺尾 重資

海外を視野に入れたビジョン

交通ネットワーク、物流機能の強化③北陸の特色ある観光資源を生かしたインバウンド観光の推進④北陸の技術・ノウハウ・特性を生かした産業の振興①の四つの重点戦略にまとめた。

一方、〇九年に国の国土形成計画「北陸圏広域地方計画」がまとめられ、北陸圏の将来像を「世界に開かれた日本海側における交流の中枢拠点、人々をひきつける暮らしやすき日本」と描いた。

東アジアの発展に伴って日本海が国際物流の大きな通路となった現在、そして北陸新幹線の金沢開業が目前に迫るなど北陸の各種インフラ整備が進む中、また東日本大震災を契機に日本海地域の重要性が再認識される今日、あらためて北陸地域のビジョンを考えるべきであり、特に海外との対応を考えた場合、北陸三県一体となったビジョン、実現に向けての取り組みが今こそ望まれると思う。

てらお・じゅうじ 1974 (昭和49) 年上智大卒。
北陸電力入社後、97年北陸経済連合会 (北経連) 理事
事務局長、2003年同専門部長、05年同常務理事、

北陸AJEC (北陸環日本海経済交流促進協議会)
常務理事事務局長。11年北東アジア学会理事。金沢
市出身。64歳。



アジア展望

北陸
AJEC
の視点



北陸の企業がどのように東南アジア諸国連合（ASEAN）と向き合えばいいか、北陸AJECはシエトロアジア経済研究所と共同で調査をしている。この中で、企業の国際化の意味合いがあらためて議論された。

参考になったのが、北陸AJECが定期的に実施している企業の国際化マインドアンケート。リーマン・ショックを挟んだトレンドだが、国際化した企業は国際化していない企業より国内生産、国内販売を落としている。国際化に伴う空洞化でないか。

一方、もつひとつの結果がある。国内の雇用は逆の動きとなっている。また経営戦略、研究開発機能も拡大したとしている。これは国際化がなかった場合、企業の存続がどうなったのかと感ぜさせる結果である。国際化の意義をあらためて感ぜさせられた。

国際化を考える国、地域はここ数年拡大・多面化し、国際化の複雑性も顕著化してい

寺尾 重資

国際化の意味合い

る。このためASEAN調査視察には、北陸AJECの企画委員で中国出身の金沢星稜大の宋涛先生に参加を依頼した。中国の視点でみた北陸企業のASEAN進出について示唆が示されると考える。

北陸は中国東北地方とは地理的に近く、経済的・人的交流も深い。中国東北地方と日本は定期的な交流会議を開催している。中国東北三省、内モンゴル自治区、そして日本の順に開催。中国側は日中交互での開催を望んでいると、出席した日中経済協力会議の関係者から聞いた。

二〇一二年のハルビン会議に参加したが、これから大きな発展の可能性のある地域であり、日本の技術を期待している。新しい経済関係を構築し「チャイナプラス一」に走るだけでなく中国を新たな形でとらえることが必要だ。

会議は一四年に内モンゴルで開催されるが、北陸新幹線が金沢まで来る一五年には北陸で開催されたと感じた。

北陸AJEC（北陸環日本海経済交流促進協議会）
常務理事事務局長。11年北東アジア学会理事。金沢市出身。64歳。

てらお・じゅうじ 1974（昭和49）年上智大卒。
北陸電力入社後、97年北陸経済連合会（北経連）理事
事務局長、2003年同専門部長、05年同常務理事、



アジア展望

北陸 AJEC の視点



日韓の政治関係が冷え込んでいる、この中で北陸AJECが関係する事業から見えた韓国サイドの考え方を紹介しようと思つた。

韓国大邱で昨年十一月に開催された第十四回北陸韓国経済交流会議で、韓国産業通商資源部はこの会議が地域間協力として成果を挙げているとして「日韓両国の関係は経済的、地理的な近さから、どちらか一国が厳しい場合はもう一国も影響を受ける二人三脚の試合をするような状況」「すなわち両国が激しい競争の中でも、ライバルではなくパートナーとして役割を果たすために努力しなければならぬことを意味する」「両国地域間の交流、協力が産業全体にかけてより高いレベルの協力を築いた時、両国の経済的な利益もさらに高めることが可能になると思つた」などとあいさつした。

また、KOTRA名古屋貿易館（シェトロに相当する韓国政府系の機関）は北陸AJ

寺尾 重資

新市場開拓へ日韓連携

ECに協力を要請し、北陸企業を訪問した。

訪問記の詳細は、この三月発刊のウォームアップブックに掲載。北陸の印象は「訪問企業の技術力にはもちろん、それ以上にものづくりに対する精神に、そしてそれを産み出した企業風土に大いに感動した」とし、新たなビジネスの展開を期待したいとする。

北陸韓国経済交流会議の支援メンバーの日韓産業技術協力財団では、日韓の企業が連携して第三国へ進出を促進しようとする動きがある。昨年はインドネシア、ことし二月にはミャンマーを訪問し、新たな市場開拓の可能性を模索している。インフラ、資源開発が主な対象であり、北陸企業にとってはなかなか入り込めない分野だが、日韓連携の新たな方向性ともいえる。

北陸AJECはこの三月、韓国と共同で、北陸地域と韓国との事業連携について調査を始めた。新しい関係を構築したい。

てらお・じゅうじ 1974（昭和49）年上智大卒。
北陸電力入社後、97年北陸経済連合会（北経連）理事
事務局長、2003年同専門部長、05年同常務理事、

北陸AJEC（北陸環日本海経済交流促進協議会）
常務理事事務局長。11年北東アジア学会理事。金沢
市出身。64歳。